
みなみやま冒険日記

s a g i t t a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

みなみやま冒険日記

【コード】

N2711B

【作者名】

Sagittta

【あらすじ】

4人の小学生が繰り広げる、夏休みのちょっとした冒険。大人にも読んでほしい児童文学。

耳を塞いでも聞こえてくるような、セミたちの大合唱。

真夏の太陽が、道路をじりじりと焼いている。

今年は雨が少なくて、水不足だとかで大変らしいけど、蒸し暑さはいつもの夏と少しも変わらないみたいだ。

つばが頭の後ろに来るようにかぶった赤い野球帽の隙間から、汗が滝みたいにあとからあとから流れてくる。かっこいい英語のロゴが入ったお気に入りの白いTシャツはもちろん、背中に背負ったりユックまでもう汗でびっしょりだ。

憎らしいほどに真っ青な夏の昼の空の下、緑の大地を一直線に横切るコンクリートの道を、ぼくは愛用の青い自転車で駆け抜けていた。

ちょっと古ぼけてはいるけどしっかりと手入れをしているマウンテンバイクは、誰もいない道路を風を切って走る。家を出る前に空気を入れてきた太いタイヤがしっかりと道路を捕らえて、とてもいい感じだ。

山の中にあるぼくらの町はどこもそうだけど、ここの道もやっぱり坂だらけで、下り坂は気持ちいいけど上り坂はきつい。

こんな暑い日には、クーラーの効いた涼しい部屋で冷たい飲み物でも飲みながらテレビゲームをしたりするのが一番だ。なのにとうしてぼくが炎天下の中自転車を走らせているのかと言うと、今日は友達と約束があるからだった。

今日は7月22日。

夏休みが始まってから三日たった今日は、ぼくたちが自由に遊べる最後の日。明日から、ぼくもリョータも、夏期講習が始まるんだ。夏休みとிட்டって、六年生にもなると無邪気に遊んでばかりもいられないもんなんだ。

だから、せつかくの自由な時間を有意義にすごそうと、ぼくたち

は今日、ちよつとした旅行を計画した。

旅行といつてもそんな大げさなものじゃない。自転車で、三時間くらい行ったところにある海まで出かけようって話なんだけど。

ぼくたちの町は山の中だから、なかなか海に行く機会なんてない。今年は大好きなプールも水不足で中止になっちゃったから、ぼくたちは泳ぎたくってしようがないんだ。

そついうわけで、ぼくは今こうして青い自転車にまたがって焼けた道路を疾走してるってわけ。とりあえずの目的地は、待ち合わせ場所のリョータんち。リョータんちは、ぼくの家からひとつ山を越えたところにあつて、そう、ちよつどこの坂を上りきれば……ふう、見えてきたぞ。

「おい、タツヤー！」

家の前にはすでにリョータが待っていて、坂を上りきったぼくを見つけて手を振ってきた。

黒っぽいマウンテンバイクにまたがった、茶色く脱色した髪が目立っているのが山岸涼太^{やまきしりょうた}。赤いTシャツや、肩からかけた黒いスポーツバッグがすごく似合ってるし、テレビに出てくる俳優みたいな顔は男のぼくから見てもかっこいいと思う。

そんなリョータはぼくの今のクラスメイトであり、幼馴染でもある。まあ、この町は小さいし、人の出入りもそんなに多くないからいわゆる「幼馴染」ってのはいっぱいいるんだけど。でもリョータとぼくは幼稚園のころからなぜか気が合つて、しょつちゅう一緒にいる。ぼくはリョータのことを親友だと思ってるし、多分リョータもそう思ってくれてるんじゃないかな。

「ああ、ナツミももう来てたんだ。遅くなってごめん」
汗でびしょびしょになった赤い帽子を脱いで、ぼくはリョータと、その後ろにいたもう一人に声をかけた。

もう一人は女の子。真っ黒なストレートの髪をショートカットにして、黄色いTシャツにジーパンという、活動的な服装をしてる。自転車は赤い、カゴつきのやつ。ぼくやリョータのクラスメイトの

風間《かざま》一夏海だ。

ナツミはここでは珍しい転校生で、五年生になってはじめて知り合った。誕生日が誰よりも早い4月3日らしくって、だからって妙にお姉さんぶるのが玉に瑕だけど、はつきりとした性格がなかなか気持ちいいとぼくは思ってる。他の女子と違ってみんなが集まってるこそ話をしたり、グループを作ったりするのは好きじゃないみたいだから、よくぼくたちと一緒に遊んでるんだ。

「おそーい。もう待ちくたびれちゃった」

「ごめんごめん、さすがに暑くてさあ。さて、行こうか……ってあれ？」

ナツミに軽く手を合わせてから、自転車のペダルに足をかけようとして振り返った瞬間に、そこにいた小さな女の子とぼっちり目が合う。

「タツヤだー、おはよー」

「……何でミナがここにいるのさ？」

「いやあ、だめだっていったんだけど、付いてきちゃってさ」

ぼくの言葉に、リョータが、決まり悪そうに頭をかきながら答える。

ぼくと目が合った、ピンク色の子供用自転車に乗った女の子は山岸水奈。

小学校二年生で、リョータの妹だ。つぶらな真っ黒な目でぼくを見つめてくる。ちょっと茶色っぽいふわふわの巻き毛にやわらかそうな真っ白な肌。どこかのアイドルかと思うくらい、かわいらしい女の子だ。服装も白のふわふわしたワンピースだし、それがすごく似合っちゃってる。

リョータはおしゃれで、運動神経もよくて、クラスの女子からひそかに人気があるくらいなんだけど、妹にはめっぽう弱い。シスターコンプレックス、ってやつじゃないかと思うくらいだ。まあ、これだけかわいい妹だと、しょうがないのかもしれないけど。

きっと今回も、ミナに泣きつかれて、断りきれなかったんだろう。

「でもさ、ミナがいたら海までなんか行けないじゃん」

ぼくはちよつと不満げに言つてやった。ミナは一応自転車には乗れるけど、やつと補助輪が取れたばかりだし、いくつも山と谷を越えて三時間もかかるとこにある海になって、行けるわけがない。

「そうね、さすがにミナちゃんに海は無理だと思つ」

ナツミも心配そうにうなづく。

「大丈夫、ミナ、海まで行けるもん」

胸を張つて言うミナは、この際無視だ。ミナはいつも子ども扱いされるのを嫌がつて「平気だもん」とか言つけど、結局あとでできなくて泣き出しちゃうんだ。それで苦労するのはいつも僕たちなんだからさ。

近所の公園かなんかで泣き出されるくらいならまだいいけど、せつせと自転車を飛ばして行つたすぐく遠いところで「もう帰るー」とか言われたらたまつたもんじゃない。

ぼくとナツミの抗議の視線を受けてるつてのに、リョータは平然とした顔をしていた。

「それでさ、相談なんだけど。……目的地変更しない？」

「変更つて、どこにさ？」

ぼくの質問に、リョータが待つてましたとばかりに指を鳴らす。

「水浪山だよ」

得意そうに答えたりョータとは対照的に、ぼくはがっかりしてため息をついた。

「水浪山なんて、しょつちゆう行つてるじゃないか。もう見るところなんてないよ」

「ほんと。あそこなら月に三回は行つてるわ」

ナツミも不満そうな顔でぼくに同意する。ミナだけはよくわかつていない顔できよとんとしていたけど。

水浪山みなみやまつてのは、ぼくの家やリョータの家から歩いて大体三十分くらいのところにある、小さな山のことだ。木がたくさん生い茂つてて、いろんな種類の虫や、リスとか、鳥なんかもいっぱいいるか

ら確かになかなか面白いところだ。だけど、この町には他に遊び場もないから、ぼくたちはホントに毎週のように水浪山に遊びに行っている。さすがに飽きてきちゃってるから、わざわざせっかくの自転車旅行の目的地にするようなところじゃない。

「だけど、なぜかリョータは自信たっぷりだった。」

「ふふん、違うんだなあ」

「違うって何がよ?」

首を傾げたナツミに、リョータはひっくり返りそうなくらい胸をそらして言う。

「こないだオレ、水浪山で大発見しちゃったんだ」

「大発見?」

ぼくがげげんな顔で聞き返すと、リョータはそう大発見なんだ、と言って大きくうなずいた。

「こないだ圭兄と水浪山探検に行つて、かなり山の奥の方まで入つて行つたんだけど」

リョータが興奮した声で話し始める。

ちなみに圭兄つてのはリョータの家の近くに住んでる中学三年生で、ぼくたちが小学校低学年だったときに色々と教えてくれたりした、ぼくたちのお兄ちゃんみたいな人だ。特にリョータは圭兄と仲がよくて、よく一緒に遊びに連れて行つてもらってるみたい。

「そのときにさ、山のちようど真ん中辺りかな、急に崖みたいになつてるところがあつて、そこを下つていったらさ、なんと」

話をそこで切つて、リョータはぼくとナツミの顔を交互に見た。

そして、さも大事な話をするみたいに声を低くする。

「滝を見つけたんだ」

「滝?!」

リョータの言葉に、思わずぼくの声が裏返つた。

滝。

「ごおっ」という音を立てて、岩壁のてっぺんから一気に流れ落ちる水の柱。

理科の教科書やなんかで写真を見たことはあるけど、本物の滝は一度も見たことない。きつとすぐくかつこよくて、きれいなんだろ
うな。

いいなあ。滝かあ。

すっかり目を輝かせたぼくに気をよくしたりョータが、さらに話を続ける。

「その日は滝を見つけた途端にすごい夕立が降ってきちゃって、あわてて帰ったからあんまりしつかりとは見てないんだ。ただどあれはマジでかつこよかつたぜ」

「本当？ それは見てみたいな！」

ぼくの横で、ナツミが歓声を上げた。

「なあ、今日は水浪山に行つて、滝を見に行かない？」

リョータがぼくに聞いてくる。隣ではナツミも、きらきらした目でぼくを見つめている。話がわかつているのかいないのか、ミナも

「滝だー滝だー」なんて言つてはしゃいでる。

もちろん、ぼくの答えはもう決まっていた。

「よーし、滝を見に行く旅に、れっつゴー！」

ああ、そうそう。ぼくのことを話すのを忘れてた。

ぼくは谷崎龍也^{たにのみき たつや}。自然と冒険が大好きな、小学校六年生だ。

そんなわけで一時間後、ぼくたち四人は水浪山のふもとに到着した。

相変わらず太陽は、いじわるに地上を焼き続けている。なるべく日陰を選んで自転車を走らせたんだけど、それにも限界がある。ぼくたちは四人とも、もう汗だくだった。

マウンテンバイクのドリンクホルダーに入れた麦茶も、ほとんど飲み干してしまってる。

本当は三十分もあればいける距離なんだけど、ミナの自転車の速さにあわせて走ってたらこんなにかかつちゃったんだ。

ミナはやっぱり、何回も「もう疲れた」だの「のど渴いた」だのと言っただけで、ぼくたちを困らせた。そのたびにリョータが必死でミナをなだめすかして、やっとここまでたどり着いたんだ。

「水浪山に行くぐらいでこんなに騒いでたんじゃ、やっぱり海にしないで正解だったね」

ぼくがちよつと意地悪く言っただけで、ミナはその柔らかさそうなほっぺたをぷくつと膨らませた。

「だって、あついなもん。坂ばっかりだし」

「ミナちゃんは、水浪山に来たのは初めてだったけ？」

ナツミの質問に、ミナはこくん、とうなずいた。

ミナはいつも、ナツミにだけは素直なんだ。ナツミの方もお姉ちゃんぶりを発揮しがあるからか、いつもは気が強いのにミナにだけはすごく優しい。だから傍から見ると、二人はまるで仲の良い姉妹みたいに見えるんだ。

「すごい、葉っぱだらけだあ」

そう言っただけで、ミナが、ものめずらしげに水浪山を見上げた。

ミナの言うとおりに、夏の水浪山は一面の緑に覆われていた。

こつやってみると、「みどりいろ」ってのは絵の具や色鉛筆なん

かである色だけじゃなくて、薄いのや濃いのが、鮮やかなのやくすんだの、ちよつと青っぽいのが黄色っぽいのが、って感じで、本当にたくさんの色があるんだなあ、って思う。

山肌全体が数え切れないほどの量の葉っぱに包まれた水浪山は、まるでありとあらゆる緑色の見本市みたいだった。

「滝があつたのはこつちだよ。早く行こうぜ」

そう言いながら、リョータはもう山を登り始めてる。白いスニーカーが土で汚れるのもかまわずに、獣道としか言いようのない、草だらけの山道をずんずん進んでいく。その足取りはもちろん、慣れたものだ。

リョータに置いていかれないようにあわてて後ろを追いかけたのが、ミナの手を引いたナツミ。ナツミだって山道は慣れてるから、ミナに気を使いながらも軽々と進んでいく。

そして最後はぼくだ。一応、ぼくとリョータは男だから、何かあったときに女の子を守ってあげなきゃいけないだろ？ だから一番前と一番後ろで、周りに注意しながら進むんだ。

リョータを先頭に、ぼくたちはどんどん草をかき分けて山の奥に入っていく。足場が悪くて土はよく崩れるし、気を抜くと下生えの草に足をとられて転びそうになったりするけれど、何度も探検した水浪山だからこのあたりはなんてことない。ミナも、ナツミに助けられながら何とか着いてきてる。

だけど、リョータを追っかけて進んでるうちに、どんどん道が険しくなってきた。草の絡まり方もますます激しくなってるし、枝も大きく張り出しているから頭がぶつからないように上にも気を配らないといけない。おまけに、秋でもないのに、土の上には湿った落ち葉がたくさん敷き詰められていて、気を抜くと滑ってしまいそうになるんだ。

ミナはちよつと進むたびに何かに引つかかって転びそうになって、ナツミがそれをあわてて押さえたりしてる。

「本当にこつちで合ってるの？」

どんだん山の奥深くに入っていくリョータに、ナツミが不安そうに訪ねた。

確かに、ぼくもちょっと不安になってきた。大きな木たちが太陽の光を遮っている森の中は、昼間なのにかなり薄暗い。あんなにうるさかった蝉の声もいつの間にかしなくなっていて、風に吹かれた木の葉がさわさわと揺れる音だけが、やけに大きく響いている。

「もちろん！ 心配しないでオレについて来いって」
振り返ったリョータが、そう言ってぼくたちに親指を立ててみせる。

「ミナ疲れちゃったよう」

「ミナ、あとちょっとで着くからな、頑張れよ」

口を尖らせたミナの頭をぼんぼん、と叩いてから、リョータはまたぼくたちにくるりと背中を向けて道を進みはじめた。

「でもさあ、水の音とか全然しないよ？」

リョータの背中に向かってぼくが言うと、リョータはちょっと立ち止まって首をかしげた。

「……ほんとだ。おつかしいなあ。こないだ来たときはこのあたりまでずっとごい音がしてたんだけど……」

「風の音しかないけど？」

ぼくはそう言ってあたりを見回す。

山の中はかすかな風の音がするばかりで、滝どころかかすかな水音さえも聞こえない。

「ねえ、道間違ってるんじゃないの？」

ナツミが不安そうな声を上げた。

「それはないよ！ ちゃんと木に目印をつけておいたんだから」
リョータがさも心外だというふうに近い木の根元を指差した。

確かに、そこには短いロープが結び付けられている。どうやらそれは、山の入り口から目的地までの道筋にある木に、大体同じくらの間隔を置いて結ばれているみたいだ。ぼくも狩人だったおじいちゃんから教わったことがある、山の中で道に迷わないための方法

だ。

「ほら、あともうひとつの目印を越えれば……」

そんなふうには呟きながら、湿った落ち葉を踏んで道の奥に進んでいくリョータ。

その背中が、ふと止まった。

「リョータ、どうしたの？」

ぼくが声をかけても、リョータは振り返らなかった。まるで固まつちやっただみたいにじっとしたまま動かない。

「リョータ？」

「お兄ちゃん？」

ナツミとミナにも心配そうに声をかけられて、リョータはようやく声を出した。

「滝が……、滝がなくなってる」

その声はかすかに、震えていた。

あわててぼくとナツミ、ミナの三人はリョータのところに駆け寄った。

そこは生い茂っていた木々が途切れて目の前が開けていて、空が見えた。そしてそこには天まで続きそうな高い岩壁がそそり立っていた。岩壁は、こげ茶や赤茶や白っぽい茶色なんかのたくさん横縞模様がついていてとてもカラフルだ。たぶん、理科の時間で習った「地層」をやっただろう。

そして、岩壁のちょうど真ん中あたり、てっぺんから一番下まで縦の線がまっすぐに刻み付けられている。あれは、おそらく滝の跡だろう。そこをゴウゴウという音を立てて壮大に流れ落ちているはずの滝の姿は、全くない。

「どういうこと？ 滝がなくなってるなんて」

「オレにもわかんないよ！ この前来たときはあったのに……」

呆然とした様子で、ナツミの言葉に答えるリョータ。あまりのことに、相当驚いてるみたいだ。

そりゃそうだ。前見たときにあつたはずの滝が突然消えていたら、誰だつて驚くに違いない。

「もしかして……水不足の影響つてやつかな？」

ふと思いついていったぼくの呟きに、リョータとナツミの視線が同時にぼくに注がれる。

「水不足で滝が枯れるなんて、聞いたことないぞ？」

「でも、確かにそれしか考えられないかも」

「ねえ、みずぶそくつてなあに？」

ミナが、相変わらず能天気な顔で小さく首をかしげた。

「あのね、今年は六月に全然雨が降らなかつたでしょ？ だからダムの水が干上がっちゃって、町中で水が足りない状態なの。だからプールも中止になっちゃったし、ミナちゃんもお母さんに、お水を無駄遣いしちゃいけません、って言われたでしょ？」

「うん、言われた」

幼稚園の先生みたいに優しい声で、ナツミがミナに説明する。ミナは、元気いっぱいにくくん、とうなずいた。

全く、ナツミのやつ、いつもこれくらい優しければちょっとはかわいいのになあ。

いや、ぼくたちにこんな優しかったら気味悪いだけか。

「あーあ、滝がないなんてなあ。全く、何でこんなときに限って水不足なんだよ。楽しみにしてたプールもなくなるし、最悪！」

リョータが機嫌悪そうに地面に座り込む。そこは岩壁から三十メートルくらい離れた、森の切れ目の辺りだ。

きっと、自分が目的地を変えようつて言い出したのに、目的のぼくが見られなくて、ぼくたちにも悪いと思っっているんだろう。昔から、そういうところ妙に責任感じるタイプだからなあ、リョータは。

確かにぼくもかなりがっかりはしたけど、水不足が原因だとすればしょうがない。自然には太刀打ちできないからね。

「まあ、しょうがないよ。このあたりでちょっと休んでいこうか」

ぼくはそう言って、リョータの隣に腰を下ろした。

リョータがチラッとぼくの方を見て、目だけでサンキュ、って言うてる。ぼくも、どういたしまして、と目で返す。リョータとぼくは長年の付き合いだからね。これだけで話は通じるもんなんだ。

「滝がなくなつて、ここは結構いい景色だと思ふな」

リョータを慰めるようにそう言って、ナツミもぼくの隣に座り込んだ。ほんとにすぐ近くに座るもんだから、ショートカットの黒い髪の毛からシャンプーの香りが漂ってきたりして、ぼくはちょっとだけドキッとすする。たぶんそれは、ちょっとびっくりしただけ。ただそれだけだ。

三人とも土がむき出しの地面にそのまま座り込んでる。ナツミは他の女子たちと違ってジープのお尻が汚れることなんて気にしないから、ぼくたちも気を使わないで山登りや川遊びに誘うことができる。そんなところも、ぼくたちとナツミが仲良くしてる理由のひとつだ。

「すっごい大きい壁！」

ミナだけは立ったままで、あちこち走り回っては目の前の岩壁をものめずらしそうに眺めてははしゃいでる。

確かに、滝なんかなくても、遙か天までそびえるカラフルな縞模様様の岩壁は、それだけで十分に壮大だった。

ぼくたちがいつも見ているような、コンクリートの人工的な灰色の壁なんかとはまるで違う。壁とは言っても平らなわけじゃなくて、尖った形の岩が突き出していたり、ふかふかと触り心地がよさそうな深緑のコケがびっしりと生えていたり、くねくねと曲がりくねった小さな木の枝が所々伸びていたりして、巨大な壁一面、一ヶ所として同じ景色のところがないんだ。

「でもやつぱり、滝がなあ」

隣でリョータが、ため息をつきながら呟く。

「うん、まあそれは確かに」

滝がなくてもこれだけ立派な岩壁だ。ここに白い飛沫を上げて流

れ落ちる水の柱があったなら、それはきつとさぞかし壮大だった
らう。そんなことを、やっぱりぼくも思ってしまう。

すっかり落ち込んだ様子のぼくとリョータを見て、ナツミも思わ
ず黙り込んでしまった。

「ねえ、お兄ちゃん、あそこ、穴が開いてる！」

三人の沈黙をあつさりと破ったのは、ミナの無邪気な声だった。

ミナは岩壁の近くにいて、その付け根あたりを指差して一生懸命に叫んでいる。

「穴？」

ミナの言葉に、リョータが首をかしげて立ち上がった。ぼくも続けて立ち上がり、ミナのいる岩壁の方に近づく。

「本当だ。穴が開いてるぞ」

「洞窟かな？」

「洞窟っていうより、ほくらみたい。ほら、奥のほうにちっちゃな鳥居みたいなのが見えるわ」

いつの間にかすぐ後ろにいたナツミも合わせて、みんなで壁に開いた『穴』を覗き込む。

ミナが指差していたのは、岩壁に刻まれた縦の線の一番下の方。つまり、もし滝が流れていたらちようどその裏に隠れてしまうはずの、滝壺のあたりだ。

そこに小さな、ぼくたち子供がなんとか一人通れるくらいの穴が、ぼっかりと口を開けている。ナツミの言うとおり、奥にぼんやりと赤く見えている柱のようなものはたぶん鳥居だろう。

「ほくらってことは……何か、神さまとかを祀ってるってこと？」

ぼくは誰にもなく疑問を口にした。

ぼくたちの住む水浪町みなみまちは、もともと水浪村みなみむらっていう名前で、何百年も前からあったらしい。そんなところだから、今でも町のいたるところに神さまを祀るほくらがある。特に山のてっぺんだとか、湖のほとりなんかには、その山や湖の神さまがいるって昔の人は信じてたみたいで、必ずと言っていいほど小さな鳥居とお供え物を置くための祭壇を備えたほくらがあるんだ。

「滝の裏にあるってことは、滝の神さまなのかな？」

リョータがそう言っつて、腕を組んで考え込む。

滝がなくなつていて落ち込んでたなんてことはすっかり忘れて、その顔はもう好奇心でわくわくしてる。

「ぼくだつて同じだ。」

だつて、滝が干上がったときだけ見える、滝の裏に隠されていたほこらだなんて、なんだかすつごくかっこいいじゃないか。

「中は真つ暗だな。リョータ、懐中電灯持ってきた？」

「もちろん、ちゃんと用意してあるぜ。二本あるから大丈夫だな」

「ちよ、ちよつと、中に入るつもりなの？」

すつかり乗り気で探検の相談をはじめたぼくとリョータに、ナツミが驚いたような声を上げる。

「あつたりまえだろ。こんな面白そうなこと、そうそうないぜ！」

「滝の裏のほこらなんて、すつごくわくわくするじゃん！」

ぼくとリョータが次々に言った。すつかり興奮してるから、思わず声も大きくなる。

「でも……仮にも神さまを祀るほこらなんだから、勝手に入ったらなんか祟りとかありそうだよ……」

不安そうな声でナツミがつぶやく。普段は気が強いくせに、意外と怖がりなんだなあ。

「大丈夫だつて！ 何かあつたらオレたちが守つてやるよ。なあ、タツヤ？」

リョータが、すつごく恥ずかしいことをさらりと言う。フツ、女子に向かつて「オレたちが守つてやるよ」なんて言えるか？

しかもそれが様になつちゃうからリョータつてばずるい。

「どうした、タツヤ？」

思わず黙つて考え込んでしまつたぼくを覗き込んで、リョータが声をかけた。

「いや、なんでもないよ」

「なあ、オレたちがいるから平気だよな？ ほら、タツヤもナツミ

に言っつてやれよ」

リョータはその顔にニヤニヤ笑いを貼り付けながら、まだそんなことを言っつてる。

「え？ ああ、うん。心配しなくても大丈夫、だよ」

リョータに促されて思わず言っつてから、自分がすごく恥ずかしいことを言っつちやっつたことに気づいた。ナツミの顔をまっすぐに見られなくて、とっさに目をそらす。視界の端でチラッと見えたナツミも、同じように目をそらしたみたい。

ちくしょう、リョータのやつ、引っつけたな。

ぼくは抗議の気持ちで、リョータの顔をにらみつけてやっつた。でもリョータはどこ吹く風で、口笛なんか吹いている。

「で、でも、ミナちゃんが」

話をそらそうと思っつたのか、ちょっとあせっつた感じでナツミが言っつた。

「ミナちゃんがいるから、中に入るのはちょっと……」

「そうだなあ、ミナが問題だよなあ」

ぼくもナツミに同意して言っつと、ミナがまたほっぺたを膨らませる。

「ミナ、へーきだよ、こわくないもん」

相変わらずミナはそんなことを言っつてるけど。

リョータもミナのことが心配なんだろう。ミナとほこらを交互に見っつめて、困っつた顔をしている。

その時だっつた。

ピシャアアッ！

でっかいビルの窓ガラス全部に一気にひびが入っつたみたいなの、鋭くて激しい音と、目がくらむような閃光。

ドゴゴオオオン！

一瞬遅れて、耳をつんざくすごい音があたりに響き渡る。あまりの音に、ぼくは思わず首をすくめた。

轟音と閃光の正体は、雷。それも、すぐ近くで落ちたみたいなものすごい雷だ。

「やだ！ 怖いよー！」

ミナが泣きそうな声を上げて、リョータにしがみつく。リョータの背中に顔を埋めるみたいにして、思いつきり抱きついてる。

ふと隣を見ると、ナツミが目をぎゅっと閉じて、泣きそうな顔をしていた。顔は真っ青で、肩が小さく震えている。

やっぱり、ナツミって実は怖がりなんだなあ。ナツミを見て、ぼくはそんなことを思う。

ピシイッ！ ドガガアアアン！

もう一度、雷が鳴った。さっきよりも激しいみたいだ。

ミナとナツミが、同時に悲鳴を上げる。

ミナはさらに力を込めて、リョータの背中にしがみついた。きつとリョータの背中は、指の跡で真っ赤になって痛いんだろうけど、リョータは何も言わないでミナのことを心配そうに見ている。

ぼくはとっさにナツミの右手を、自分の左手でそっと握ってあげた。そうした方が、少しは怖いのがまぎれるかなって、思ったんだ。ナツミは一瞬おどろいた顔をしたけど、もう一度大きな雷の音がすると、また小さく悲鳴を上げて、ぼくの手をぎゅっと握り締めた。ナツミの手は思ったよりも柔らかくて、ぼくは少しだけドキッとした。

立て続けの激しい雷は、たぶん五分くらい続いた。

雷がやむと、今度は、ザアアアアツ、という音を立てて、それこそ滝みたいな大雨が降ってきた。バケツどころか、プールをひっくり返したみたいなものすごい夕立だ。

「やーん、びしょびしょー！」

「うっわ、すごい雨！ 取り合えずどっか避難しようぜ！」

ミナがかわいい顔をしかめて口をとがらせ、リョータが雨の元に負けないようにほとんど怒鳴るみたいにして言う。

巨大な雨粒が体に当たって痛いくらいで、口の中まで水が入ってくるから息も苦しくなる。

ぼくたちは、あわてて、あたりをきよるきよる見回して雨宿りができるところを探した。でも、目の前を大きな岩壁で囲まれた谷底のようなこの場所に、雨宿りできるところなんてなかなかない。木の下でやり過ごすには、雨の勢いが強すぎる。

「ねえ、あそこ、あそこに避難しよう！」

とっさに思いついてぼくが指差したのは、滝の裏のほこらだ。

ぼくの言葉にリョータもうなずいて、ぼくはナツミの、リョータはミナの手を引いてほこらに向かって走る。

ナツミはまだ少し怖がってたみたいだけど、滝に打たれてるみたいな雨の中にとっさというわけにはいかないと思ったのだろう。振り返ったぼくに小さくうなずいて、ほこらに向かって走り始めた。

ほこらの前にたどり着くと、まずリョータとミナが、そのあとにぼくとナツミが中へ飛び込んだ。

あわててはいても、真っ暗なほこらの中には何があるかわからなから状況確認を怠っちゃいけない。

ぼくらはほこらの入り口の、何とか雨がしのげるあたりでいったん立ち止まった。リョータが肩から提げていたスポーツバッグを開けて、懐中電灯をふたつ取り出し、ひとつをぼくに投げてよこす。

スイッチを入れてみると、あたりがほのかに明るくなった。雨でびしょびしょになっていたけど、壊れてはいないみたいだ。とりあえずみんなの顔が見えるように、ぼくとリョータは懐中電灯を上向きにおいた。

「ふー、すごい雨だな」

リョータが赤いTシャツのすそを絞りながら言った。すそからは、

ジャバジャバと音を立てて、大量の水が零れ落ちる。

四人とも、服のままプールに入ったみたいにびしょ濡れだった。今が夏でよかった。これが冬とかだったら、寒くて絶対風邪引いてたな。

「ちよつと、二人ともこつち見ないでよ、えつち」

「えつちー」

びしょびしょのTシャツを手で隠しながら、ナツミが僕とリョータをにらみつけてくる。隣でミナまでナツミの真似をしてる。

「だ、誰が見るかよ！」

ぼくはあわててナツミから目をそらす。

ちえつ、かわいくないの。さつきまで雷が怖くて震えてたくせにほんの少しだけどきどきしたことを気づかれないうちに、ぼくはみんなに背中を向けて、ほこらの奥に目をやった。

目がくらやみに慣れてきたのと懐中電灯のかすかな光とで、ほこらの中の様子が少しずつ見えてくる。

そしてぼくは、その光景に目を奪われた。

「湖だ……」

入り口からは想像もできないほど広大なほこらの奥に広がっていたのは、大きな湖だった。

ぼくらのいる、ほこらの入り口のすぐそばに大人の男の人の背丈くらいの古びた赤い鳥居があって、その向こうにはコバルトブルーの絵の具みたいいな色をした青い水面が、かすかな光に照らされてきらきらと輝いていた。

「すごい……こんな洞窟の中に、湖があるなんて」

「湖、きれー」

ぼくの隣でナツミとミナが、感動した声を上げた。

それは本当にきれいで、神秘的な光景だった。

「なあ、あそこ、建物みたいのがあるぜ」

リョータが、湖の方を指差して言う。

リョータの指差す方向を見ると、湖の真ん中あたりに小さな島の

ようなものが見えた。半径2メートルくらいしかない、小さな小さな島だ。そしてその島いっぱいに、神社をちっちゃくしたみたいな建物が建てられていた。

「社……かな？」

ナツミがつぶやく。

ナツミの言うとおり、神さまをまつるための社むらみたいに見える。

社全体がかすかに青く光っているみたいに見えるのは、湖の青さを反射しているからだだろうか。

「あ、橋があるよ」

ふと気が付いて、ぼくは湖を指差した。

よく見るとぼくたちのいる湖のこっち岸から、社が建てられた島まで、立派な石の橋が架けられていて、歩いていけるようになっていた。

「行ってみよう」

つぶやくように言って、リョータが湖の方に歩き出した。

あんなに怖がっていたはずのナツミも、それにミナでさえも、何も言わずに社にむかって橋を渡りはじめる。その後ろから、ぼくも続いた。

怖いとか気味が悪いとか、そんなことは少しも思わなかった。

みちびかれる、っていうのかな？ 誰かに呼ばれているような、

そこに行かなければならないような、そんな気がしたんだ。

橋を渡り終えて、青い湖の真ん中に浮かぶ島にたどり着く。

先頭を歩いていたリョータも、橋を降りたところでぼくらを待っててくれた。

間近で見る社は、やっぱり青白く光っていた。社自体が光っている、というよりは、社の中にある何かが光っていて、その光が隙間から漏れ出しているような感じだった。その光は、夏の夜の川辺に集まった蛍の光を何倍も強くしたみたいな色をしていて、すごくきれいだっただ。

「ここになんか書いてあるぞー！」

島を色々と見て回っていたリョータが、社の脇に細長い石を発見した。石にはぼくたちがまだ習っていない難しい漢字が掘り込まれている。たぶん、石碑っていうやつだ。

ナツミが好奇心に目を輝かせてそれに近づく。

「きつと、ここにまつている神さまの名前よ！ ええつと、タテ、ハヤ……ダメだ、ぜんぜん読めない」

『タケハヤノミツチミチノミヌシノミコト
建速御槌水浪主命だ』

その声がほこらに響いたのは、その時だった。
すつごくきれいな声。

ぼくは驚くことも忘れて、そんなことを思った。

男の人か女の人かもわからない。そのちょうど中間くらいの、な
んていうかすごく……透き通った声。

ぼくたちみたいな子供じゃなくて、間違いなく大人の、すごく落
ち着いた声だ。

「あなたはだれ……あ、どなた、ですか？」

ぼくはようやくちよつとだけ落ち着きを取り戻して、その声に尋
ねた。声がどこからしたのかもわからないから、ほこら全体に聞く
みたいにしたら。

『今、名乗ったつもりだったかな？』

やっぱりほこら全体に響いたきれいな声は、ちよつと笑ったみた
いだった。といつてもいじわるな笑いじゃない。お父さんが小さな
子供の頭をなでてやりながら浮かべるみたいな、すごく優しい笑い
方。

「ってことは……神さまなの？」

「かみさまー？」

ナツミが、信じられない、という顔でつぶやき、ミナも驚いた顔
でかわいく首をかしげて見せる。

確かに信じられないようなことだけど、ぼくにはなぜかすんなり
信じられる気がした。声があまりにきれいだったのと、このほこら
がすごく神秘的だったからだろうか。

『神か……そう呼ばれていたこともあったな』

応えた声は、今度は心なしか寂しそうだった。

『いまやこの社を訪れるものもない。それに……われ自身も弱り

果てて往年のような力は残っていない』

「えーと、タケハヤ……さま？」

うーん、ダメだ、どうしても名前が覚えられない。

でも、寂しそうな神さまに何かを言っただけで、ぼくは思わず声を上げた。

『わが神名は、覚えにくいであろうな。タケハヤでかまわぬよ』

きれいな声が、苦笑するように言う。やっぱりそれはとても優しい声だった。

「じゃあ、タケハヤさま。あなたはどのようにして弱っているんですか？

お参りする人がいないから？」

『それもあるな。だが一番の理由はそれではない。……社の扉を開けてみよ』

「社を？」

ナツミが、気後れしたように言う。ぼくたちは大人たちから、神さまをまつてる社には絶対に触っちゃいけないって小さいころからしよっちゅう言われて育ったんだ。

でも実際にまつられてる神さまがいつ言ってるんだからいいに決まってる。

もうぼくは、その声が本物の神さまの声だっただけを確信していた。

ぼくがそつと社の扉に手をかけると、扉はまるでそれを待っていたかのように、音も立てずにゆっくりと開いた。あふれ出した青白い光が、ぼくの視界を包む。

社の中には、金属のろうそくや水差しなんか置かれた小さな祭壇があって、祭壇の真ん中には表面に複雑な模様が彫られた、木でできた小さな箱がちょこん、と置いてあった。社の中にあふれている青白い光は、どうやらその箱からもれ出ているみたいだった。

ぼくはそつと、箱の上に乗せられていたふたをずらしてみた。

箱の中は……なんと、空っぽだった。

「あれ、何もない？」

ぼくは拍子抜けして箱の中をしばらく見つめていた。箱の中は空だ。何も無いのに、青白い光だけがひたすらに外に漏れ出している。

そうつと、箱の中に手を入れてみたけど、やっぱり何の感触もしなかった。

「これって、御神体をまつる祭壇よね？ この空っぽの箱が御神体、ってことなのかしら」

いつの間にか隣で箱をのぞき込んでいたナツミが、首をかしげてつぶやいた。

「いや、魂代……つまり、神体と呼ばれているものはその箱の中にあつたものだ」

「あつたもの、ってことは、今は別のところにあるってこと？」

リョータが腕を組んで首をかしげる。タケハヤさまの透き通った声が少しだけ辛そうにそれに答えた。

「今は、湖の底に沈んでいる」

「どういうこと、ですか？」

「三月ほど前、地神どもが暴れただろう。人間たちが地震と呼ぶ、大きな地揺れが起こつたはずだ」

尋ねたばくに、タケハヤさまがせせらぎのような声で話す。

「そういえば、地震あつたな」

リョータが、うんうん、とうなずく。

そう、あれは確か5月のはじめごろ。授業中に急にぐらつときて、みんなで机の下に避難したんだ。

あとでテレビを見たら、震度4だつて言つてたな。この町のすぐ近くが震源地で、幸いけが人はいなかったけど、棚から物が落ちてきたりしてお店なんかではけっこう被害があつたみたいだ。

「あのとときの地揺れで、我が社は倒壊してしまつたのだ」

そのときの様子を思い出したのか、タケハヤ様が不機嫌そうに言う。

……でも、社が倒壊って？

「でも、社はここに……壊れた様子もないけど？」

不思議そうに、ナツミがつぶやいた。

『社は、我が力で何とか直すことができた』

「直した、って……」

すごいことをさらりと言うタケハヤさまに、ぼくは思わずごくり、とのを鳴らした。

ぼくが今話している相手は、まぎれもなく神さまなんだ。人間には絶対にできないようなことを、簡単にやってしまうような。

『だが、湖の中に落ちた魂代を拾い上げることは適わなかった……。あれが離れている限り、われは力を失っていくばかりだ。今ではこのあたりに雨を呼ぶことすら適わなくなってしまった』

「雨？　もしかして、タケハヤさまって、雨の神さまなんですか？　今年水不足なもの、タマシロ、ってのが湖に落っこちちゃったせい？」

ぼくの言葉に、タケハヤさまの声は静かに答えを返す。

『それは正確ではないな。われはただ、この地の水をつかさどり、雨を呼ぶだけだ。天空の雨そのものを創っているわけではない。だが……水不足に関してはそのとおりだ』

「このままだとどうなっちゃうの？」

沈みこんだタケハヤさまの声に、ナツミがあわてた声を上げた。

『ろうそくの炎が掻き消えるように、われは滅んでゆくのだろう。』

その先、この地がどうなるかはわれにも想像できぬ。だがそれも自然の摂理なれば……やむを得ぬのだろうな』

言葉とは裏腹に、タケハヤさまの声は悔しそうだった。

人間じゃなくて神さまなのに、どうすることもできないタケハヤさまの声は、とても弱々しく思えた。

だからぼくは、思わずこう言ったんだ。

「ぼくが、湖から魂代を拾ってくるよ」

岩陰で、海で泳ごうと思って持ってきていた黒い短パン型の水着に着替えてから、ぼくは湖のふちに立ってみた。

のぞきこんだ湖の水は恐ろしいほどに透き通っていて神秘的だった。薄暗いほころの中でも、かすかに湖の底の滑らかな岩肌が見えるくらい。

深さは、どれくらいだろう？

少なくともぼくらの背丈よりもだいぶあつて、かなり深い。

『せめて魂代が見えるように、われの力を注ぎ込もう』

タケハヤ様が湖の水よりもさらに透き通った声でそう言うと、湖の底の一ヶ所が急に明るくなった。何かが、青白いきれいな光を発している。祭壇の箱の中から漏れ出していたものよりもずっとはっきりとっていて、力強い光だった。

「あれが……タマシロ？」

『ああ、われの魂が込められた大真珠だ』

タケハヤさまが言う。光の中心にあるものは、大きな真珠の粒らしい。

「あれを取ってくればいいんですね」

『ああ、すまない……頼む』

「大丈夫ですよ、ぼくは泳ぐのすごく得意なんですよ」

すまなそうなタケハヤさまの声に向かってぼくはにっこりと笑って見せた。

「本当に大丈夫か？ オレが代わりに行くこうか？」

横からリョータが心配そうに顔をのぞかせる。その背中には、ミナがぴつたりとくっついていて。ぼくはちよつとだけ笑って見せた。「大丈夫だよ。それにリョータは、ミナのお守りをしてないんだめだろ？ リョータが行ったらきつと泣き出しちゃうよ」

ぼくの言葉に、ミナがちよつとだけ目をそらすけど、リョータに

しがみついている手は離さない。やっぱり何だかんだいっても薄暗い洞窟の中で不安なんだろう。

「タツヤ、無理しちゃダメだよ？」

不安そうな声で、ナツミがぼくの肩に手を置いた。ぼくのむき出しの肩に伝わるやわらかい感触が、なんだかくすぐつたい。

「大丈夫だって。ナツミは安心して、ここで待っててよ」

ぼくがそう言つと、ナツミはまだちょっと不安そうな顔のまま、小さくうなずいて手を離す。

ぼくはもう一歩前に出て、湖の底を見下ろした。そしてゆっくりと深呼吸をする。

ぼくの腰には、長いロープを巻きつけてあった。命綱だ。ロープの先は、リョータとナツミがしっかりと握り締めている。

「何かあったら、すぐにロープを引くからな」

「無理しないでね」

「タツヤ、頑張れ」

三人の声を背中に聞きながら、ぼくは静かに、湖の中に飛び込んだ。

透き通った湖水は、思っていたよりもずっと冷たい。

その冷たさがぼくの頭をはつきりさせて、ぼくは水底で青白く光る真珠めがけて一直線にもぐっていった。

深いところに進んでいくにつれて重い水圧が体中にのしかかってきて、なかなか前に進めなくなる。

腰に巻きつけた命綱が絡まないように気をつけながら、ぼくは両手両足で必死で水をかいて、もがくように進んでいった。

プールや海でよく泳いではいるけど、こんなに深くまでもぐったことはない。水ってほんとに重いなあ、なんてことを頭の片隅で考えながら、ぼくは進んでいった。

体中があつという間に疲れてくる。腕と足の筋肉が悲鳴を上げて休もうとするのを必死で励まして、気合を入れて水をかく。

あんまり力を入れてみると、呼吸が荒くなって息が続かなくなってしまうから気をつけないと。かなり息も苦しくなってきたとき、ようやく目的のものが見えてきた。

青白い光の中心にある、ビー玉くらいの大きさの白い珠。こんなに大きくてきれいな真珠を、ぼくは見たことがなかった。

思わず、水をかく手を止めて見入ってしまった。

ついたため息が泡になって、のぼっていった。

我に返ったぼくは、あわてて真珠に手を伸ばす。

あと少しだ、あと少しで手が届く。

あと50センチ……30センチ……よし、あと10センチ……。届いた！

右の手のひらに、青白く光る真珠をしっかりと握り締める。

やった、と思った瞬間、意識が遠くなった。

息を吐きすぎたせいだ。どうしよう、水面に戻らなくちゃ。

なぜか妙に冷静な意識でそんなことを思うけど、体が思うように動かない。

その時、腰の辺りに衝撃。

上でリョータとナツミが、命綱を引っ張っているみたいだ。

何とか意識をはっきりさせたぼくはロープにすがるようにして、必死で上に向かって水をかく。

夢中で腕と足を動かしているうちに、何も考えられなくなった。

気が付くとぼくは、水の外にいた。

ゆっくりと目を開けた顔の上で、ナツミとリョータが心配そうな顔をしていた。

リョータとナツミに引き上げられて、どうやら少しの間気を失っていたらしい。

はっとしてぼくは、自分の右手を見た。ゆっくりと指を開いたそこには、青白く光る真珠がちゃんとあった。

「やったあー！」

そう叫んでがばつと上半身を起こした僕に、突然、ナツミが抱きついてきた。

「バカ！ 無茶するなって言ったじゃない！」

ぼくの冷えた体に急激に流れ込んでくる温もりに、ぼくは目を白黒させた。

「な、ナツミ？」

「心配したんだから！ 死んじゃうかと思ったんだから！」

痛いくらいにしがみついてくるナツミは、どうやら泣いているらしかった。

「ほんと、無事でよかった」

「心配したよ」

苦笑したりヨータと、その背中にしがみついたミナが、口々に言う。

ナツミはまだ、ぼくにしがみついて泣いていた。

ほんと、女の子ってよくわからない。

でもまあなんていうか。

……悪くない気分だな。

ぼくは、ナツミに抱きつかれたまま、苦笑しながらつぶやいた。

「みんな、ただいま」

次の日、7月23日の朝。

ぼくとリョータ、ナツミそしてミナの4人は、再び水浪山の前に集まっていた。

ぼくとリョータは塾の夏期講習をサボって来てる。あとでこっぴどくしかられるだろうけど、しょうがない。だって今日は特別だ。

昨日の夜は、なんと3ヶ月ぶりにこの辺りにまとまった雨が降った。雨は夜の間中ずっと降り続いていて、水不足はかなり改善されたい。

もちろん、魂代が祭壇に戻ってタケハヤさまが力を取り戻したからなんだけど、それを知ってるのはぼくたち4人だけだ。ぼくたちはそれを誰にも言わなかった。言ったらって信じてもらえとは思えないし、ぼくたちだけの秘密って言うのはなんだか気分がいい。リョータは、ミナがお母さんに話しちゃわないようにするのにだいぶ気を使ったみたいだけど。

そして今日、どうしてぼくたちがここに集まっているのかというと、タケハヤさまと約束したからだ。

魂代を祭壇に戻して力を取り戻したタケハヤさまは、ぼくたちにすごく感謝してくれて、こう言ったんだ。

『本当に感謝している。お礼の代わりにとっては何だが、明日の朝またここに来るといい。そのときには我の真実の姿を見せられるだろう』

声だけしか聞いたことがない、タケハヤさまの「真実の姿」だなんて、見たくないわけがなかった。

そういうわけでぼくたちは、朝早くからここに集まったってわけ。昨日の夜の大雨がうそみたいに、今日はとてもいい天気だ。これもきつと、タケハヤさまの計らいなんだろうな。

暑さはもしかしたら昨日以上かもしれないけど、わくわくしてる

ぼくたちには、そんなことは気にならない。ミナでさえ、今日は一言も文句を言ったりしないんだ。

自転車を山の入口に置いて、ぼくたち四人は足取りも軽く山の中に入っていく。

「ねえ、聞こえる？」

ぼくが興奮した声で、みんなに聞く。顔がにやけてくるのが抑えられない。

「ああ、聞こえるぜ」

「うん。聞こえる聞こえる」

「すごい音」

三人も、顔をほころばせながら答える。

山の奥に入っていくにつれて聞こえてくる、しゅしゅしゅという音。

それは紛れもなく、滝の音だった。

ついに滝が見られるんだ！

気かはやるぼくたちは、前に来たときの倍くらいのスピードで、山をかき分けていく。ミナもナツミに手を引いてもらいながら、しっかりと付いてくる。

ぼくらの目の前の、森が開けた。

「すごい！」

「かつこいー！」

ぼくとリョータが、同時に声を上げた。

「きれい……」

「わー、たきだー！」

ナツミとミナも歓声を上げる。

そそり立つ岩壁を伝って、天から一直線に流れ落ちる、一本の水の柱。

それはさながら、その長い身体をくねらせて天空を目指す、白い龍。

力強くて優しく、美しくて雄大。

飛び散る水しぶきが、体にまとわりつく熱気を吹き飛ばし、清浄

な風を運んでくる。

滝は、太陽の光を受けてきらきらとさまざまな色に輝いていて、しぶきが生み出した霧きりぎりすの中には、七色の小さな虹が浮かんでいた。ぼくたちは同時に理解した。

この滝こそが、水浪山とぼくらの町を護る水の神にして龍神、タケハヤさまの真実の姿なんだってこと。

歓声を上げて見とれるぼくたちの姿にこたえるように、タケハヤさまの優しい笑い声が、雄大な滝の音に混じって聞こえたような気がした。

6 (後書き)

ここまでお付き合いいただきありがとうございます！
タツヤたちの小さな冒険が、あなたの心をわくわくさせて
たならこれに勝る喜びはありません。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2711b/>

みなみやま冒険日記

2008年11月7日07時28分発行